

「まちかど研究室」の取り組みについて

新潟産業大学 文化経済学科 3年 小林樹 駒村彩佳
新潟工科大学 知能機械・情報通信学系ロボティクスコース 3年 櫻井敬太
指導教員 新潟産業大学 権田恭子
新潟工科大学 黒木宏一

0. 今年度のまちかど研究室の活動

H24年度から継続実施している中心市街地の空き店舗活用事業「まちかど研究室（以下、まち研）」は、H29年度に6年目を迎えた。以下3つの事業を柱とした運営体制は3年目となり、二大学の学生、学友会、ゼミ等が、大学の専門性や若者らしい感性やアイデアを発揮しながら、柏崎を元気にするための様々なプロジェクトに取り組んだ。

- ① 二大学学友会共同プロジェクト
- ② ゼミ・団体によるプロジェクト
- ③ 市民向け講座

1. 二大学学友会共同プロジェクト

11月18日、二大学の共同プロジェクトである「まち研スタンプラリー@商店街」が開催された。今年で3年目を迎えるこのイベントは毎年大変好評で、二大学の学友会メンバー約50名のスタッフが春から準備を進めてきた。小学生は、3人一組で大学生のスタッフと一緒に柏崎の駅前一駅仲ニコニコ商店街、西本町一東本町にある約40か所の商店や寺院などのチェックポイントを回り、商店や柏崎にちなんだクイズに答えながらスタンプを集め。商店主のみなさんからは、店舗を訪れた小学生を温かく迎え、工夫をこらしたクイズを出題していただいた。

当日はあいにくの天候だったが、参加した70名の小学生は元気によちを歩き回り、ゴールの市民プラ

ザ海のホールで豚汁やお菓子が振る舞われた。上位チームには商品として柏崎市の銘菓や商店街で使える地域通貨「風輪通貨」が贈られたが、上位入賞者には2度目、3度目の参加者も見られ、地域の恒例行事として小学生たちに徐々に定着している様子が窺えた。



2. ゼミ・団体によるプロジェクト

各大学のゼミや団体がそれぞれの専門や関心に沿って取り組むプロジェクトは、新規のもの、継続実施のものを合わせて、下記の二大学合計8件のプロジェクトが実施された。「まち研カフェ+季節のイベント」、「地域通貨『風輪通貨』」、「書道とふれあいの会」、「大学生の農業体験と地域住民との交流促進」

（以上産大）、「卒業生、学生による生産物販売と廃食用油回収」、「1/1000 柏崎市都市模型の制作」、「認知症を抱える家族からみるサポート環境の検証」、「グリーンバード柏崎」（以上工科大）。

(1) まち研カフェ+季節のイベント

3年目を迎えた今年度のまち研カフェは、6月から2月まで毎月4～5日間、月ごとのコンセプトを決めて、勉強や休憩のためのカフェスペースを提供するとともに、主に小学生を対象とした季節のイベントを開催した。スタンプカードを導入することで



毎月楽しみにしてくれる子どもたちも増え、年間で36日開店し、のべ約400名が来店した。また、「書道とふれあいの会」による布絵体験のワークショップや、柏崎の農業を学ぶセミナー等、個々のプロジェクト発信の様々な講座が実施された。



(2) 生産物販売による地域と学生との交流

「卒業生、学生による生産物販売と廃食用油回収」プロジェクトでは、4月から月一回程度、まちかど研究室で野菜販売を実施している。この野菜は廃油の再生エネルギーを利用した飼料から育てられたもので、野菜を購入しにきた市民からは、「野菜も安いし素晴らしい取り組み。活動を広げて行って欲しい」と言った声も聞かれ、再生エネルギー、循環型社会の重要性を感じてもらう機会ともなっている。

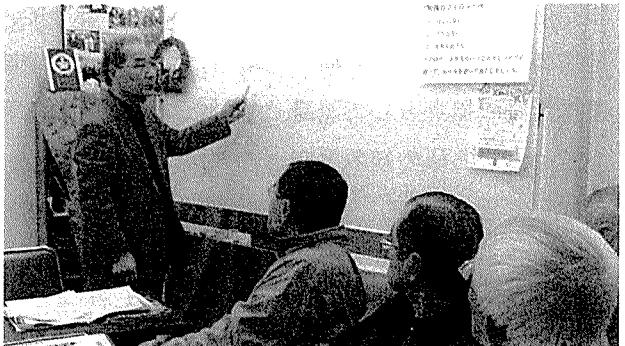


3. 市民向け公開講座

今年度は下記の計5回の市民向け公開講座を提供了。「クラシック・タタタタン（U・Iターン情報プラザで実施）」、「第4回中国語サロン」、「戊辰戦争と越後柏崎」（以上産大）、「建築模型づくりワークショップ（第1回／第2回）」（以上工科大）。参加者は高校生から年配者まで、幅広い世代の地域の方の興味に応じた講座で、知的で楽しいひとときを過ごしていただいた。多い講座では約20名、5回の合計で約70名の参加があった。



「建築模型づくりワークショップ」



「戊辰戦争と越後柏崎」

4. 今年度の成果と来年度の方向性

ほかにも、今年度も柏崎市社会福祉協議会と連携した学習支援事業を長期休業中に実施したり、産大の語学系の授業を一部まち研で実施したりといった学内外の様々な用途で拠点を有効活用できた。また「U・Iターン情報プラザ」も積極的に活用し、複数の団体がワークショップ等を開催した。

今年度は現行の運営体制になって3年目であり、スタンプラリー やカフェ等、前年度からの継続実施となるプロジェクトが目立ったが、これは決して事

業全体のマンネリ化ではなく、事業を継続実施することで一定の成果が表れていると考える。スタンプラリーでは昨年、一昨年の小学生参加者が約 50 名であったのに対して、今年度は 70 名が参加。まち研カフェも開店日数を大幅に拡大し、年間のべ約 400 名が来店した。そして今年度のまち研全体の稼働日数（拠点活用）はのべ約 230 日であり、多くの学生や地域の方がまち研の店舗を訪れたことを表している。

また、今年度は各種メディアでまち研の活動を探り上げられることが多かった。新潟日報紙面企画である「地ラボニイガタ」では、全面記事でえんま市やスタンプラリーの様子が紹介され、メディアシップで開催された他大学との交流イベント「地ラボミーティング」にも参加し、活動報告を行った。更にはNHK、NST、毎日新聞、新潟日報、柏崎日報、FMピッカラ等でまち研主催のイベントや公開講座が紹介された。「地ラボニイガタ」のwebサイトではまち研及び、各大学の地域連携活動ブログを随時更新し、またfacebookのまち研アカウントでも随時情報発信を行っている。こうした情報発信によって、地域の方にとってまち研は柏崎市における大学地域連携活動の拠点として認識していただき、活動内容も含めたまち研の知名度向上に繋がったと考える。



「地ラボニイガタ」紙面
(『新潟日報』平成 29 年 6 月 25 日)



「地ラボミーティング」の様子

今年度の成果を踏まえて、来年度の方向性として現時点では下記のような改善策を検討している。第一に、「まちづくりワークショップ」の実施である。これまで学生の興味関心を軸として事業を進めてきたが、学生と商店主等地域の方との話し合いの場を通じて、新規プロジェクトを提案、実施していくたい。第二に、事業全体に対する二大学共同プロジェクトの割合を増やし、二大学の学生が協力して取り組んでいくイベントを現在の秋に加えて、別の季節にも新設することや、これまで大学毎に実施して来た取り組みの中から、可能なものは一部共同での実施へ移行する。第三に、上記 2 点も含めて、年間スケジュールを見直して、より効果的な事業実施を目指す。

7 年目も学生と地域の方が共に知恵を出し合い、語り合って、共に中心市街地や柏崎を元気にするための活動に楽しく、精力的に取り組んでいきたい。